

サッカーの米国代表は昨年のコンフェデレーションズカップ準決勝でスペインを倒し、決勝でブラジルを苦しめた。6大会連続のワールドカップ（W杯）出場となる常連国はもはや「サッカー不毛の地」ではない。その発展を支えてきたのは、ビジネスに徹する北米のプロリーグ。存在感を高めている米国サッカーのいまをリポートする。



▷ 1 ◁

いつになったら米国のジデスらの手で青写真は
サッカー人気は高まるの 描かれた。

「メジャーリーグサッカー（MLS）」のネルソン・ロドリゲス副社長はそんな問いを聞き飽きたという。「すでに人気だよ。サッカーは国民に受け入れられている」

ボールをける子どもや若者の数も多い。ただ、サッカーは週2回程度のレクリエーションとみられ、

「我々は若い。最初の5年は生き残りに必死だったが、15年でインフラを整えた。成長期はこれから」と同副社長。

れがち。学歴がものをいう社会で、サッカー少年たちは大学進学を選び、キャリアを終えてしまう。問題は、サッカーがプロスポーツとして認知されにくいことだった。

現在、MLSには「良いオーナー」、正しい市場分析、適切なスタジアム、という3原則になった。16クラブが存立するが、選手が交渉・契約する相手はクラブでなくリー

以上のクラブを抱える」とはできる」(同副社長)というが、リーグに携わる成員が受け取るパイの一切れ一切れを小さくしかねないエキスパンション(拡大路線)へと急ぐつもりはないという。

が8つあり、さらに4つが建設中。合言葉は「スタジアムの灯を消すな」で他のイベントを積極的に呼んでフル稼働させる。FCダラスは1試合平均入場者が1万人弱とリーグ最低でも、スタジアム

灯を消すな

勝たないと稼げない経営構造は欧州の金満リーグに任せておき、長期的に利益を確保する基盤づくりに投資する。専用スタジオを備えるクラブのキーワードにこの2つ

米国の過去のW杯成績

開催年	成 績
1930	ベスト4
1934	1回戦敗退
1950	1次リーグ敗退
1990	1次リーグ敗退
1994	ベスト16
1998	1次リーグ敗退
2002	ベスト8
2006	1次リーグ敗退

(注) 38年大会は不参加、54～86年大会は地区予選敗退

グ部門を「サッカーユナイテッドマーケティング（SUM）」として分社化し、MLSにとどまらず米国代表、北中米でのカップ戦、欧州クラブの米国ツアー、メキシコ代表の興行まで傘下に収める。おかげでそれぞれの

大きな成長力が潜在し、縮小リスクは見あたらない」。SUMのキャシー・カーター副社長はそう請け合い、ロドリゲス副社長も47カ国もの選手たちが跳ね回るMLSの未来図を裏しげに語る。「南部は南米風、シカゴは欧州式で西海岸はメキシコ流。多様性の国にふさわしい多彩で世界唯一のリーグにもなれる」

市を開いてスポンサーメ
リットと駐車場収入を得
たり。職員がファンとど
もに街を練り歩くことも
ある。

狂的なヒスパニックが4
500万人ほどいるとさ
れる。その規模はスペイ
ン(約4500万人)や
アルゼンチン(約4千万
人)に匹敵する。選手育成と代表強化に汲
「埋蔵金」はマネーだ
けではない。アスリート
の卵という無尽蔵の鉱脈
が眠る国。日本のように

ツアー盛況
MLSはマーケティング

「米国のサッカーファンは約9千万人。市場には

が大勢いる以上、興行の
体裁さえ整えば世界一流
のタレントがいずれ群れ
をなし、米国代表という
ショーウィンドーを華や
かに飾るはずとの読みが
あるからか。

(岸名章友)

ビジネス徹し「成長期」



年俸高騰抑制 ■ 多様性生かす

昨年のML Sの1試合平均入場者数

シアトル・サウンダーズ	31,203
ロサンゼルス・ギャラクシー	20,827
トロントFC	20,344
レアル・ソルトレーク	17,831
ヒューストン・ダイナモ	17,624
チバースUSA	15,725
DCユナイテッド	15,585
シカゴ・ファイアー	15,487
コロンバス・クルー	14,175
コロラド・ラピッズ	13,018
ニューヨーク・レッドブル	12,744
ニューイングランド・レボリューション	12,427
サンノゼ・アースクエイクス	10,329
カンザスシティ・ウィザーズ	10,053
FCダラス	9,883



米国 サッカー Now

▷2◁

「この数年で戦術と組織力が世界レベルに高まった。一番の強み? 精神面とれた守備組織、高いスアの強さだ」。米国代表監督のボブ・ブラッドリーはチームの充実を口にする。

一つの到達点が、昨年6月のコンフェデレーションズカップ準決勝。無敗記録を続けていた欧州の雄、スペインを撃破した。「コンパクトな陣形で、個々が連動することを中心けている」とブラッドリー。あえてスペインにボールを持たせ、華麗なパスサッカーをただのパス回しにさせた。

欧州チャンピオンズリーグ準決勝でバルセロナを破ったインテル・ミラノのジョゼ・モウリーニョの戦術は、スペインを封じたブラッドリーの戦術とより二つ。米国ではこんな議論もたつた。米国サッカー

が熱を帯びている。ボール保持率は低くとも、均整のとれた守備組織、高いスアの力、鋭い逆襲を武器に勝機をうかがう。

2006年ワールドカップ(W杯)は1分2敗で1次リーグ敗退。元ドイツ代表監督のユルゲン・クリンスマンが監督就任寸前まであったが、破談。とりあ

堅守速攻 お手の物

ず担がれたのがブラッドリーだった。長く米国でコーチ業に携わってきたこの暫定監督は、米国人選手の特長を熟知していた。無名の若手も登用し、結果を残す。「彼はチームに化学変化をもたらした。米国サッカーをよく知る彼だからできたことだ」と、メジャーリーグサッカー(MLS)公式リポーターのサイモン・ボルクは解説する。

称して「スパー・ブリランドは攻めてくるからいい。問題はスロベニア戦。事前の分析と対策に余念が速くて技もあるFWがい



「W杯では世界のトップ勢と競えることを示したい」と語るブラッドリー監督(左)

「才能大国」育成は道半ば

米国の南アW杯での試合日程

	対戦相手	会場	対戦成績
6月12日	イングランド	ルステンブルク	2勝7敗
18日	スロベニア	ヨハネスブルク	初対戦
23日	アルジェリア	プレトリア	初対戦

(注)日付は現地時間。対戦成績は国際Aマッチ

さは「母国」と似通う。フロリダ州に40人の原石を寮住まいさせ、競わせる。この米国サッカー協会の育成プログラムは名高く、U-17(17歳以下)W杯では1999年に4強入りした。しかし大学・プロでの育成はおさなりなので、英才も壁にぶつかると。

「米国アスリートの特性は勝利への執着心と規律の高さにある。ゆえに競争心も高い。足りないのはサッカーの高度な技術と戦術の遂行力」と、MLSテクニカルディレクターのアルフ・モンデロ。協会主導で育成制度は整いつつあり、来年からMLS全クラブがU-18、U-16、U-14の編成に乗り出す。

「国がこれだけ広げりや才能には不足しない。子どもがMLSを見てプロを目指す。技も磨かれる」。ボルクもモンデロも未来の話となると楽観的になるのだった。

(岸名章友)



▷3◁

サッカーにアメリカンフットボール、松坂大輔ら大リーグ選手、ハンマー投げの室伏広治らも足を運ぶトレーニング施設。それがアスリッツ・パフォーマンス(AP)だ。

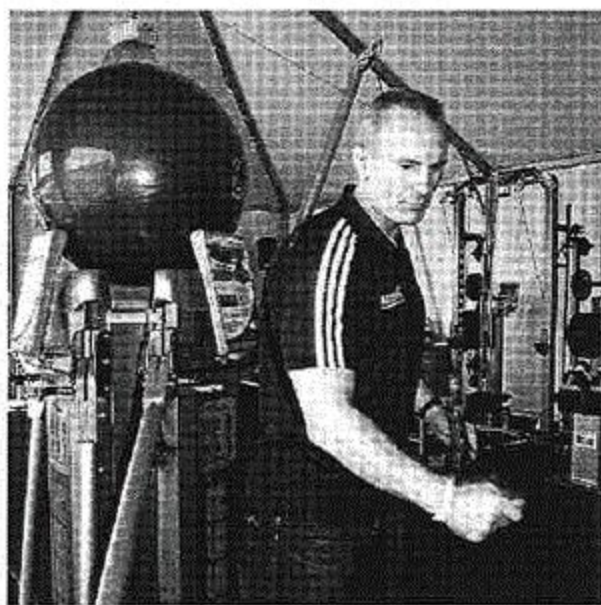
「サッカーでも体の正しい動作が重要。ボールを持たない時間は長いから」。4つある拠点の一つ、ロサンゼルスで、創業者でチェアマンのマーク・バースがドイッツ製機器を実演してみせる。動きが数値化されモニタリングされる。左右対称か、ゆがみはないか。「自然で理想のスクワットができるのは誰だと思っ? 赤ん坊だよ」。

ハードとしての肉体より、動かし方に相当するソフトウエアを磨いていく。

体の改善 科学総動員

を施す。脳科学、心理学、栄養学、生理学……。各種の知見から解決策を導き、わかりやすく示す。「我々はサポート役であり、いわば(スポーツ科学の)通訳

でもある。そして選手とともに学び続ける」。栄養摂取でも至れり尽くせり。トレーニング場の脇に練習前、練習中、練習後の持続も目指すところだ。こうした手法に着目した



「大事なものはハードとしての肉体よりもソフトウエア」とバース・テゲン氏は語る

速く長く動く「賢い筋肉」

のが元ドイツ代表監督のユルゲン・クリンスマンで、2004年からチームに導入した。06年のワールドカップ(W杯)3位となった体力・持久力の養成はAPの支えあつてのものだった。SBフィリップ・ラーはW杯直前にひじを故障、手術したが、2日後に合宿に合流。大会で全7戦690分を走り抜いた。「ドイツは走力など一部分を改善したのではない。APを通じて自分たちの組織改革や文化の変革につながった」とバース・テゲンは言う。

08年欧州選手権、尽きぬスタミナで準決勝まで進んだトルコも顧客だ。もちろん、躍進する米国代表が誇る運動性能にも一役買っている。メジャーリーグサッカー(MLS)も自分たちが技術で世界に劣り、科学で差を埋める必要性を自覚して、発足時からAPと二人三脚で歩んできた。APの施設が組み込まれたスタジアムがあり、プレー分析に役立てる。若年層の育成でもかわりを深めている。現代のサッカー選手は走行距離を延ばさないとけない。この説は誤りも多いとバース・テゲンは注意する。「データによれば激変したのは距離ではなくスピードだ。今の強いチームは90分間、最大の瞬発力で走る頻度が高くなった」。留意すべきはハイスピードでの動きを持続すること。「スピード持続の可否が勝敗を分ける。もっと走れと叫ぶだけではダメだ」。

(岸名章友)



▷4◁

かつて横浜M、大宮などでプレーしたMF原田慎太郎(29)が米国に渡って4年がたつ。所属するのはメジャーリーグサッカー(MLS)の下部に当たる独立リーグのピッツバーグ・リバーハウンズ。この小クラブを足場にMLS、そして欧州への飛躍を夢見る原田は「こちらの人は自分が楽しむために生きている。楽しむことがすべての前提。その精神風土がサッカーにも反映されている」。集団である前に、個を表現して認められようとする。

「プレッシングにタツシユ、いつも休まず全速力」。日一の幅は広がっていた。余り裕が生まれ、自分の味を出もやれる気がするんです」。日本では考え過ぎで、抵抗感があったCBも板

「プレッシングにタツシユ、いつも休まず全速力」。日一の幅は広がっていた。余り裕が生まれ、自分の味を出もやれる気がするんです」。日本では考え過ぎで、抵抗感があったCBも板



自ら動き楽しむ気風

「プレッシングにタツシユ、いつも休まず全速力」。日一の幅は広がっていた。余り裕が生まれ、自分の味を出もやれる気がするんです」。日本では考え過ぎで、抵抗感があったCBも板

日本人も奮闘「まずトライ」

米国で生きる原田(写真上、ピッツバーグ・リバーハウンズ提供)も中村も、日本サッカー界の特殊性を痛感している



・マーケティングに携わる員への道が開けた。中村武彦(34)は5年半、MLSの国際部に働いたことがある。本採用に至るまでのエピソードが面白い。インタースタッフになっていきなり、上司に「休みを下さい」と切り出した。帰国してJリーグのクラブや広告代理店を回る。そこで集めた名刺の束をMLS幹部の前に置いた。「僕を雇えば、コリターンが大きいとみなす」。日本人初のMLS職

負。常に発言、提案しなくてはならない。いわば、走りながら考える」。米国、日本、オーストラリアのクラブが覇を競うパンパシフィック選手権は中村の発案で生まれた。成否は後で考えればよいというお国柄。理屈ではなく、現場感覚を重視して仕事を進める。いつかJリーグも日本の外へ出て国際舞台でビジネスを展開しなければならぬ日が来ると信じている。「そこで自分が役割を果たしたい」。磨いたサッカービジネスの腕を生まれ故郷のために振るいたいと願う。「いいものをいいものとして取り入れていくスピードがすごく速い」。米国で原田と中村が痛感すること。タフでポジティブでためらいがない。その精神がサッカーをビジネスとして強力に動かしていく。

敬称略 (岸名章友) おわり